

学 会 消 息

◇日本広告学会

日本広告学会第23回全国大会が1992年10月23日（金）と24日（土）の両日、静岡県立大学において開催された。本学からは真鍋一史教授が出席し、統一論題「広告の新しい方向を探る」のセッションで朝日広告社の西本浩三氏との共同研究の成果を踏まえて「国際広告の新しい方向を探る」と題する共同発表を行った。

◇日本社会学会

第65回日本社会学会大会が1992年10月31日（土）と11月1日（日）の両日、九州大学において開催された。本学からは真鍋一史教授が「コミュニケーション」のセッションで「高度情報化時代における日本人の文化的アイデンティティ—日本人論に見られる文化的ナショナリズムを中心として—」と題する発表を行った。

高坂健次教授は「いじめ問題にたいするフォーマル・アプローチ」について研究発表を行った。大学院博士後期課程の栗田真樹君は「ライフスタイル」のセッションで「現代消費社会における人間行動—消費関与の概念を手がりとして—」、森真一君は「基礎理論」のセッションで「フロイト無意識論について—社会学から見た再評価—」と題するそれぞれの研究発表を行った。

◇日本社会心理学会

日本社会心理学会第33回大会が1992年11月4日（水）と5日（木）の両日、大阪大学人間科学部において開催された。本学からは真鍋一史教授が「文化・国際比較」のセッションで「高度情報化時代における日本人の文化的アイデンティティ—国際広告の事例を中心として—」と題する研究発表を行った。また総会において、学会監事として平成3年度の監査報告を行った。

◇日本マス・コミュニケーション学会

日本マス・コミュニケーション学会1992年度

秋季研究発表会が11月14日（土）、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスで開催された。本学からは津金沢聡広教授、真鍋一史教授、石川明教授、芝田正夫教授が出席し、真鍋一史教授は〈研究発表〉の部の司会を担当した。なお前日の午後には、サテライト・ミーティングとして、同キャンパスの教育・研究用情報システム見学とこれに関連する問題についての意見交換が行われた。

執筆者紹介 (掲載順)

佐々木 薫	関西学院大学社会学部長・教授	芝野 松次郎	関西学院大学教授
セイモア M. リブセット	アメリカ社会学会会長	中川 千恵美	関西学院大学研究員
	ジョージメイソン大学教授		関西学院大学カウンセリング ルームカウンセラー
小関 藤一郎	関西学院大学名誉教授		関西学院大学助教授
中田 國夫	関西学院大学教授	立木 茂雄	関西学院大学大学院社会学 研究科博士課程後期課程
谷川 賀苗	神戸アジア都市情報センター研究員	横須賀 修司	関西学院大学大学院社会学 研究科博士課程後期課程
	国連アジア太平洋经济社会委員会 社会開発部コンサルタント	中野 秀一郎	関西学院大学教授
小牧 一裕	社団法人国際経済労働研究所員	芝田 正夫	関西学院大学教授
山山 貞夫	関西学院大学教授	眞鍋 一史	関西学院大学教授
倉田 和四生	関西学院大学教授	春名 大介	日本アイ・ビー・エム株式会社 システム・エンジニア
山本 剛郎	関西学院大学教授		関西学院大学大学院社会学 研究科博士課程後期課程
荒川 義子	関西学院大学教授	栗田 真樹	
松岡 克尚	関西学院大学大学院社会学 研究科博士課程後期課程		

社会学部研究会会員

会 長	佐々木 薫						
運営委員	中野 秀一郎	春名 純人	西山 美瑛子				
	鳥越 皓之	芝野 松次郎	正村 俊之				
会計監査	中山 慶一郎	宮田 満雄					
書記	岡部 衛一郎						
名誉会員	本出 祐之	小関 藤一郎	萬成 博				
	西尾 朗	岡村 重夫	領家 穰方				
	嶋田 津矢子	定平 元四良	杉原 方				
	清水 盛光	栃原 知雄					
	(A B C 順)						
普通会員	田中 國夫	倉田 和四生	杉山 貞夫				
	半田 一吉	武田 建	牧 正英				
	遠藤 惣一	森川 甫	張 光夫				
	J.A. ジョイス	船本 弘毅	津金 澤聰				
	紺田 千登史	村川 満	眞鍋 一史				
	山路 勝彦	山本 剛郎	高田 眞治				
	荒川 義子	安藤 文四郎	浅野 仁				
	高坂 健次	中西 良夫	石川 明				
	對馬 路人	芝田 正夫	宮原 浩二郎				
	立木 茂雄	A. ブレイディ	川久保 美智子				
	荻野 昌弘	三浦 耕吉郎	谷 直子				

関西学院大学社会学部研究会会則

第1章 総 則

第1条

本会は関西学院大学社会学部研究会と称する。

第2条

本会は本学部における社会学と関連諸科学の教育・研究の推進を計ることを目的とする。

第3条

本会は事務局を西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学社会学部内におく。

第2章 事 業

第4条

本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究会などの開催
2. 機関誌「関西学院大学社会学部紀要」などの刊行
3. 会員相互の研究・教育に関する連絡および協力
4. 本学部の教育・研究に対する協力
5. 国内外関係諸学会との協力
6. その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会 員

第5条

本会の会員は次のとおりとする。

1. 名誉会員 本会に功労のあったもので、本会の推薦するもの
2. 普通会員 本学社会学部専任の教授、助教授、講師および助手
3. 賛助会員 本会の趣旨に賛同するもの

第4章 運営組織

第6条

第2章記載の事業を行うため、本会には以下の委員、委員会等をおく。

1. 会長は当該年度の社会学部長とし、本会には以下の委員、委員会等をおく。
2. 運営委員（6名）：運営委員は普通会員の中から互選し、運営委員会を構成する。
3. 運営委員長（1名）と会計（1名）：運営委員長と会計は運営委員の中から互選する。
4. 運営委員会は第4条に記された事業の企画・運営にあたる。

なお、機関誌「社会学部紀要」の編集については運営委員会内に複数の委員をもって構成される編集委員会を置く。編集委員長は、運営委員長が兼ねることがある。

5. 会計監査（2名）：会計監査は普通会員の中から互選する。
6. 書記は社会学部事務長に委嘱する。

第7条

本研究会委員の任期は2年とする。重任を妨げない。

第5章 総 会

第8条

総会は定期総会と臨時総会とし、会長が主宰する。定期総会は毎年一回開催され、臨時総会は会長が必要と認めたとき、あるいは普通会員の1/2以上の要求があった場合に開催される。議決は出席者の過半数をもって行う。

第9条

総会の承認を必要とするものは第6条第1項のほか、次の事項とする。

1. 事業計画および収支予算
2. 事業報告および収支決算
3. その他運営委員会において必要と認めた事項

第6章 会 計

第10条

本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第11条

本会の経費は次の収入をもってあてる。

1. 会 費
普通会員年額 19,200円
賛助会員年額 10,000円
2. 寄付および補助助成による金品
3. その他の収入

第12条

本会員および本学社会学部大学院学生・大学院研究員並びに学部学生は機関誌の配布を受ける。学生の購読費は年間1,600円とする。

付 則

第1条

本会の事業運営に必要な諸規定は、運営委員会の議を経て別に定めることができる。

第2条

本会の会則変更および本会の解散、ならびに、これに伴う財産の処分等については、総会において、出席者の2/3以上の同意を得ることを要する。

第3条

本会則は1992年4月1日より施行する。

「社会学部紀要」編集内規

1992年4月1日施行

1. 「社会学部紀要」（以下、本紀要という）は原則として、当該年度中に2回発行する。6月末を締切日とする号は10月上旬の配布を11月末日を締切日とする号は3月25日の配布を目標とする。
2. 本紀要の企画、編集、発行は社会学部研究会「社会学部紀要」編集委員会がおこなう。
3. 本紀要に掲載される原稿の種類は以下に掲げるものとする。
 - ①原著
 - ②研究ノート
 - ③学部および社会学部研究会主催、共催の講演会の講演原稿
 - ④書評、内外の学術研究、学術集会の動向の紹介
 - ⑤その他編集委員会が必要と認めた記事
4. 本紀要への投稿有資格者は社会学部研究会名誉会員、ならびに普通会员とする。なお、共同執筆者は名誉会員あるいは普通会员の推薦を受けた者、名誉会員あるいは普通会员と共同研究をおこなった者とする。

大学院学生ならびに研究員単独の論文原稿の掲載に関しては、普通会员による推薦と編集委員会の審査を経て決定する。
5. 原稿の執筆に際しては、以下の様式に従うものとする。
 - ①原著については、原則として図表、写真を含めて200字詰め原稿用紙100枚以内、研究ノートについては原則として図表、写真を含めて200字詰め原稿用紙60枚以内とする。ワードプロセッサによる原稿については字数においてそれらに相当する分量とする。
 - ②手書き原稿に用いる原稿用紙は研究会指定の200字詰め横書き原稿用紙とする。
 - ③図表、写真等は題字、説明つきですべて本文とは別紙とし、本文中に挿入する個所を本文欄外に指示すること。

図凸版（トレース、写植代）は10,000円を限度として社会学部研究会が負担するが、それを超える分は執筆者の負担とする。
 - ④原稿には和文および英文の表題をつける。また執筆者名、所属機関名についても同様とする。
6. 本紀要に発表する原著論文、研究ノートは他に未発表のもの、または学会大会等での口頭発表の主題をその学会等の了解のもとに原稿にまとめたものに限られる。
7. 外国語による原稿については編集委員会において審議の上、許可することがある。分量は日本語原稿の場合に準ずるものとする。
8. 編集委員会が依頼した外国語原稿を翻訳して掲載する場合には、その翻訳者に対し翻訳料を支払うものとする。その金額については社会学部研究会運営委員会で審議の上決定する。
9. 本紀要に掲載された論文等は無断で他の雑誌等に転載することを禁ずる。

また、執筆者がすでに外国語または日本語で発表した論文等を日本語または外国語に翻訳して掲載を希望する場合には、編集委員会において審議のうえ、それを許可することがある。ただし、この場合、著作権処理に関する責任は全て執筆者が負うものとする。その場合の翻訳料は支払わない。
10. 本紀要の執筆者に対しては本誌1部と抜刷30部を無料で配布する。ただし、それ以上の抜刷を希望する場合、その実費は本人の負担とする。
11. 発行された紀要は名誉会員、普通会员、大学院学生、大学院研究員および学生に配布する。また、本紀要は上記以外の者に頒布することができる。なお、頒布料は原則として学生の購読料と同額とする。
12. この編集内規は研究会運営委員会の議を経て変更することがある。ただし、その変更はその年度の社会学部研究会総会で報告されなければならない。

＜編集後記＞

軽妙洒脱な語り口。ユーモアたっぷり、しかも学究にふさわしい含蓄のある名講義で多くの学生達を魅了した社会心理学の田中國夫先生。『社会学部紀要』第67号は、その田中先生が関学を去られるにあたっての退職記念号です。生まれながらの人間観察者であった先生は、毎年ゼミ学生を連れて東南アジアを歩き回られる時、「やってはならないことは sightseeing、やらなければならないことは humanseeing だ！」と学生達に激をとばされたそうです。今後とも、お元気でご活躍されますことを祈念いたします。

さて、紀要の編集に携わって思うことの一つに、(もちろん、専門的な論稿も多いので少々難しいかと思うのですが) この紀要が社会学部の学生達にも大いに役に立つものであって欲しいということです。ゼミの時間などで先生が少し解説を加えながら、この紀要を教材に何か勉強してもらえるような工夫が出来ないものかと思うこともあります。そうした方向への一歩として、最近では外国人研究者による学術講演を、オリジナルが英語の場合にはそのまま収録することにしました。本巻にも去年の夏に行われた現アメリカ社会学会会長 S. M. Lipset 博士の学術講演「北アメリカの二つの国家—カナダとアメリカの比較社会学」を英語のまま掲載しています。「英語の関学」を復活させるマテリアルとして利用していただければ幸いです。

今回も、名誉教授の小関先生が健筆をふるっておられます。田中先生からはアジアの都市に関する研究成果の第2弾をいただきました。ご投稿いただいた先生方には厚く御礼申し上げます。いつものことながら、「卒業式の日に間に合うように」というストレスを一人でひっかぶって編集の仕事をお手伝いしてくださった事務室の染谷廸子さんには深く感謝の意を表します。(中野)

1993年3月1日 印刷

1993年3月10日 発行

編集発行人 佐々木 薫

発行所 関西学院大学社会学部研究会

〒662 西宮市上ヶ原一番町

関西学院大学社会学部内

電話(0798)(53)6111(代表)

(内線) 4212

印刷所 尼崎印刷株式会社

〒660 尼崎市北大物町16-55

電話 (06)481-0707(代)

KWANSEI GAKUIN

SOCIOLOGY DEPARTMENT STUDIES

(SHAKAIGAKUBU-KIYO, KWANSEI GAKUIN DAIGAKU)

No. 67

March 1993

The Study Association of Sociology Department

KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

Nishinomiya, Japan
